2026.8.15 (経済面) 毎日

〔第3種郵便物認可〕

温暖化 欧州原発「水」リスク

川の水位低下 冷却に支障

欧州の原発が、猛暑や少雨による記録的な川の水位低下などで、操業停止や運転制限に追い込まれる事態が相次いでいる。欧州では発電時に温室効果ガスを出さない電源として原発への期待が高まっているが、足元では気候変動に伴う「水の異変」が操業を脅かす皮肉な状況に直面している。

水温上昇で停止も

ルーマニアの国営原発会社「ヌクレアエレクトリカ」は13日、南東部にあるツェルナボダ原発の原子炉1基を稼働停止したと発表した。ドナウ川が低水位となり、原子炉を冷却するのに十分な水量を確保できなくなったためだ。

ツェルナボダ原発では、1基が7月に停止している。川の流れを遮る岩石を動かすために軍隊が爆薬を用いるなどしたが、結局全基停止に追い込まれることになった。この原発はルーマニア唯一の原発で、国内発電量の2割を担う。政府は企業や家庭に節電を呼びかけている。

ハンガリーでも、ルーマニアより上流のドナウ川沿いで稼働し、同国の総発電量の半分を占める南部パクシュ原発の発電容量が一時は通常の10%まで抑えられ、稼働停止の一歩手前まで追い込まれた。ハンガリーではドナウ川の水位が一時過去最低の23㌢まで低下した。東欧各地ではドナウ川底から第二次世界大戦時のドイツ軍の軍艦などが見つかったことが話題を集めた。今回の水位低下は気候変動の影響とみられている。

原発大国フランスでも13日、川の水温上昇により原発6基が停止。仏紙ルモンドが報じた。川の水温が一定以上になった場合、原発からの排水でさらに水温を高め、生態系を破壊する事態を防ぐために稼働が制限されるためだ。スイスでも6月、水温上昇で原発が一時停止した。

原発には原子炉の熱を冷やすため大量の水が必要で、欧州では川沿いに建設することが多かった。近年では干ばつや水温上昇によるリスクが目立ち始めており、冷却塔を建設することで取水量を減らす方法はあるが、建設コストは高まる。



ドナウ川の水位低下でむき出しになった浅瀬を歩く人々＝ルーマニア東部ランバで7日、AP

このためフランスでは、新設原発は日本同様に海沿いに建設するケースが増えている。ただ、仏電力（EDF）が運営する北部グラブリーヌ原発では8月上旬、海温上昇で大量発生したクラゲの群れがポンプ機能を損ない、一時3基が稼働停止に追い込まれた。

欧州連合（EU）域内の総発電量に占める原発の割合は2024年に23・3%に達した。11年の東京電力福島第1原発事故後は「脱原発」の機運が高まったが、近年では天然ガスなどロシア産エネルギーへの依存脱却や気候変動対策の両面から、再評価を受けている。今年2月末以降の中東情勢の混乱によるガス価格の上昇も追い風といえる。

だが、気候変動が起こした川の水位低下や水温上昇に弱く、エアコンなどの電力需要が高まるこの時期に、思うように発電ができないリスクが今夏改めて浮き彫りになった。欧州の今後のエネルギー政策への影響も注目される。【アチ・カステッロ（イタリア南部）岡大介】